

# 助け合いの文化 今も

## 東・南予の庶民金融「無尽」「頼母子」

「頼母子(たのもし)」「文化」について調査してください。東予では「無尽」と呼ばれるのですが、大洲市では頼母子と呼ばれ、盛んに行われています。新型コロナウィルス禍で休止になることも多いですが、県内の最新事情をぜひ取材してみてください。

(大洲市の40代男性)



人とのつながりを阻む新型コロナ禍でも、助け合い文化は途絶える様子はない。県内では、主に南予で「頼母子」、東予では「無尽」と呼ばれる庶民金融だ。基本的にはみんなでお金を出し、1人が順番に総取りする決まりで、このシステムを使った定期的な人の集まりも指す。

愛媛新聞の「真相追求 みんなの特報班」(通称・みんなの「元気の源」と二つの頼母子)に取材を依頼した男性は「無尽」に所属。無尽が盛んな今治市でも「精神的な救いであり生きがい」との声が多い。古くから続くアナログな集まりが



定額になるまで積み立てたり、会員全員で行く旅行費用に充てたりするケースもある。単に飲食を楽しむ親睦型もあれば、少数派だが事業運営や家計に窮した仲間を助ける資金型もある。

会員の大半は40〜70代の男

### 「温かい人付き合い」「見識も深まる場」

性で、10〜20人程度の集まりが多い。日ごろの付き合いから始まり、同級生や仕事・趣味仲間、意気投合した飲食店の常連など多種多様。昔は最初に挙手して大金をもらい「ドロンする人」もいたといい、信頼関係が何より肝心だという。交友関係が広い人は10以上の会を掛け持ちしている。少なくともお金を毎月支出している会員。メリットはどこにあるのだろう。

「無尽で人の輪が広がりが生きがいにつながった」。第一印刷(同市)の会長だった故西原透さんは今年6月、72歳で他界するまで母校の今治西高校の同級生や地銀関係者など九つの会に参加していた。

生前、特報班の取材に、友人とどこそを囲む楽しみをしみじみと語っていた。約10年前に妻に先立たれてからは、一人で過すことが多くなった夕飯の時間を仲間が明るく彩ってくれたという。「たわいもない話で笑い合える関係が最高で、人生を豊かにしてくれた。買っていたのは料理だけでなく、楽しい思い出と温かい人付き合いだった」。地域外から来た地縁も血縁もない人にとっては、「コミュニティ」とつながる潤滑油の役割もあるようだ。結婚を機に松山市から今治市に移り住

### 親睦から資金調達まで ルール多様 複数所属も

異業種の40代を中心に集まり、親睦を深める頼母子のメンバー。26日夜、大洲市中村(撮影・薬師神亮太)



人間関係も資金も欠かせない」と話す。

大金を民間でやりとりする講に違法性はないのか。免許を持たずに職業として行えば無尽業法違反になるが、しまたなみ法律事務所(今治市)の寄井真二郎弁護士(54)によると、飲み会で掛け金を集めて会員に順次手渡す程度では行為を規制する法律はないという。ただ、金利を付けて利益を増やす賭け無尽など、うまみを出す手法に抵触する可能性があるため「親睦目的での開催を」と呼び掛ける。

県内文化に詳しいフリーライターの中野昭さん(67)は、特に今治市で無尽が慣習化している理由を「今治人の商売に懸ける情熱のためでは」と考察する。昔から造船やタオルなど地場産業が盛んで「石を投げれば社長に当たる」といわれる商人の町。「銀行より早く資金調達できた上に、楽しみながら情報収集できる。得た情報で道を切り開く進取の気性が地域性と合っている」と語る。

30代以下では、無尽や頼母子に参加する人も少なくなってきた。濃密な人間関係を負担に感じる人も少なくなく、会員制交流サイト(SNS)や多様な融資サービスの普及も背景にありそうだ。

ただ、時代の波にさらされながらも、無尽や頼母子は何百年と形を変えながら続いていた。縦横無尽に広がる人々のつながりが、ままたらぬ人の世を生き抜く市民の知恵で、よりどころなのかもしれない。(森満里子)

んだ会社役員で平林伊佐子さん(67)は「一生の友人が見つかった」と話す。結婚当初は知人のいない町で仕事にまい進する日々だったが、自営業仲間を誘われて入った約10人のランチ無尽が転機に。別の仲間数人も飲み会無尽を開くようになり、今では大親友だ。無尽の縁を頼りに顔なじみも増え「最初の出会いがなければ、この町に自分の居場所はなかった」と感謝する。

一方で興味深いのは、無尽を「貴重な情報交換の場」と評価する人もいることだ。平林さんの夫で会社を営む元樹さん(72)は、経営者ら。今治は商売人が多い町。